

柿本人麻呂の歌（2）相聞と挽歌

柿本人麻呂相聞・挽歌一覧

巻	番号	部立	歌体	内容
卷二	一三一	相聞	長歌	石見相聞歌 1 a
卷二	一三二	相聞	短歌	石見相聞歌 1 a
卷二	一三三	相聞	短歌	石見相聞歌 1 a
卷二	一三四	相聞	短歌	石見相聞歌 1 b（一三二の或本歌）
卷二	一三五	相聞	長歌	石見相聞歌 2
卷二	一三六	相聞	短歌	石見相聞歌 2
卷二	一三七	相聞	短歌	石見相聞歌 2
卷二	一三八	相聞	長歌	石見相聞歌 1 c（一三一の或本歌）
卷二	一三九	相聞	短歌	石見相聞歌 1 c（一三二の或本歌）
卷四	四九六	相聞	短歌	濱木綿の歌以下四首
卷四	四九七	相聞	短歌	
卷四	四九八	相聞	短歌	
卷四	四九九	相聞	短歌	
卷四	五〇一	相聞	短歌	袖布留山の歌以下三首
卷四	五〇二	相聞	短歌	
卷四	五〇三	相聞	短歌	
卷二	一六七	挽歌	長歌	草壁皇子挽歌
卷二	一六八	挽歌	短歌	草壁皇子挽歌
卷二	一六九	挽歌	短歌	草壁皇子挽歌（或本歌）
卷二	一九四	挽歌	長歌	川島皇子挽歌
卷二	一九五	挽歌	短歌	川島皇子挽歌
卷二	一九六	挽歌	長歌	明日香皇女挽歌
卷二	一九七	挽歌	短歌	明日香皇女挽歌
卷二	一九八	挽歌	短歌	明日香皇女挽歌
卷二	一九九	挽歌	長歌	高市皇子挽歌
卷二	二〇〇	挽歌	短歌	高市皇子挽歌

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28
卷三	卷三	卷三	卷三	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二	卷二
四三〇	四二九	四二八	四二六	二二三	二二二	二二一	二二〇	二一九	二一八	二一七	二一六	二一五	二一四	二一三	二一二	二一一	二一〇	二〇九	二〇八	二〇七	二〇二	二〇一
挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌	挽歌
短歌	短歌	短歌	短歌	短歌	短歌	短歌	長歌	短歌	短歌	長歌	短歌	短歌	短歌	長歌	短歌	短歌	長歌	短歌	短歌	長歌	短歌	短歌
出雲娘子挽歌	出雲娘子挽歌	土形娘子挽歌	香具山の屍を見ての悲慟歌	臨死自傷歌	石中死人挽歌	石中死人挽歌	石中死人挽歌	吉備津采女挽歌	吉備津采女挽歌	吉備津采女挽歌	泣血哀慟歌 2 b (或本歌)	泣血哀慟歌 2 b (或本歌)	泣血哀慟歌 2 b (或本歌)	泣血哀慟歌 2 a	泣血哀慟歌 2 a	泣血哀慟歌 2 a	泣血哀慟歌 2 a	泣血哀慟歌 1	泣血哀慟歌 1	泣血哀慟歌 1	泣血哀慟歌 1	高市皇子挽歌 (或書歌)

柿本朝臣人麻呂、石見国より妻に別れて上り来る時の歌二首 短歌并せたり

① 石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 瀉なしと一に云ふ、磯なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦は無くとも よしゑやし 瀉は一に云ふ、磯は無くとも
 鯨魚取り 海辺を指して 和多津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る
 風こそ寄せめ 夕羽振る 浪こそ来寄せ 浪の共 か寄りかく寄る 玉藻なす
 寄り寝し妹を一に云ふ、はしきよし妹がたもとを 露霜の 置きてし来れば この道の
 八十隈毎に 万たび かへりみすれど いや遠に 里は放りぬ いや高に 山も
 越え来ぬ 夏草の 思ひ萎えて 憊ふらむ 妹が門見む 靡けこの山(二・一三二)

反歌二首

② 石見のや高角山の木の際よりわが振る袖を妹見つらむか(一三二)
 ③ 小竹の葉はみ山もさやに乱るともわれは妹思ふ別れ来ぬれば(一三三)

或る本の反歌に曰はく

④ 石見なる高角山の木の間ゆもわが袖振るを妹見けむかも（一三四）

⑤ つのさはふ 石見の海の 言さへく 韓の崎なる 海石にそ 深海松生ふる 荒磯
にそ 玉藻は生ふる 玉藻なす 靡き寐し児を 深海松の 深めて思へど さ寝し
夜は いくだもあらず 這ふ蔓の 別れし来れば 肝向ふ 心を痛み 思ひつつ
かへりみすれど 大船の 渡の山の 黄葉の 散りの乱ひに 妹が袖 さやにも
見えず 孀隠る 屋上の一に云ふ、室上山山の 雲間より 渡らふ月の 惜しけども
隠ろひ来れば 天つたふ 入日さしぬれ 大夫と 思へるわれも 敷栲の 衣の袖
は 通りて濡れぬ（一三五）

反歌二首

⑥ 青駒の足搔を早み雲居にそ妹があたりを過ぎて来にける一に云ふ、あたりは隠り来にける
（一三六）

⑦ 秋山に落つる黄葉しましくはな散り乱ひそ妹があたり見む一に云ふ、散りな乱ひそ
（一三七）

或る本の歌一首 短歌并せたり

⑧ 石見の海 津の浦を無み 浦無しと 人こそ見らめ 湧無しと 人こそ見らめ よ
しゑやし 浦は無くとも よしゑやし 湧は無くとも 勇魚取り 海辺を指して
柔田津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 明け来れば 浪こそ来寄せ 夕さ
れば 風こそ来寄せ 浪の共 か寄りかく寄る 玉藻なす 靡きわが宿し 敷栲の
妹が手本を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十限ごとに 万度 かへり
見すれど いや遠に 里放り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ 愛しきやし わが孀
の児が 夏草の 思ひ萎えて 嘆くらむ 角の里見む 靡けこの山（一三八）

反歌一首

⑨ 石見の海打歌の山の木の際よりわが振る袖を妹見つらむか（一三九）

右、歌躰同じといへども句々相替れり。因りてここに重ねて載す。

柿本朝臣人麻呂、妻死りし後、泣血哀慟して作る歌二首 短歌并せたり

⑩ 天飛ぶや 軽の路は 吾妹子が 里にしあれば ねもころに 見まく欲しけど 止
まず行かば 人目を多み 数多く行かば 人知りぬべみ 狭根葛 後も逢はむと
大船の 思ひ憑みて 玉かざる 磐垣淵の 隠りのみ 恋ひつつあるに 渡る日の
暮れ行くが如 照る月の 雲隠る如 沖つ藻の 靡きし妹は 黄葉の 過ぎて去に
きと 玉梓の 使の言へば 梓弓 声に聞きて一に云ふ、声のみ聞きて 言はむ術 為
むすべ知らに 声のみを 聞きてあり得ねば わが恋ふる 千重の一重も 慰むる

情もありやと 吾妹子が 止まず出で見し 輕の市に わが立ち聞けば 玉襷
畝火の山に 鳴く鳥の 声も聞えず 玉梓の 道行く人も 一人だに 似てし行か
ねば すべをなみ 妹が名喚びて 袖そ振りつる或る本、名のみ聞きてあり得ねばといへる
句あり (二・二〇七)

短歌二首

⑪ 秋山の黄葉を茂み迷ひぬる妹を求めむ山道知らずも一に云ふ、路知らずして (二〇八)
⑫ 黄葉の散りゆくなへに玉梓の使を見れば逢ひし日思ほゆ (二〇九)

⑬ うつせみと 思ひし時に一に云ふ、うつせみと思ひし 取り持ちて わが二人見し 走
出の 堤に立てる 槻の木の こちごちの枝の 春の葉の 茂きが如く 思へり
し 妹にはあれど たのめりし 児らにはあれど 世の中を 背きし得ねば かぎ
ろひの 燃ゆる荒野に 白栲の 天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日な
す 隠りにしかば 吾妹子が 形見に置ける みどり児の 乞ひ泣くごとに 取り
与ふる 物し無ければ 男じもの 腋はさみ持ち 吾妹子と 二人わが宿し 枕づ
く 孀屋の内に 昼はも うらさび暮し 夜はも 息づき明し 嘆けども せむす
べ知らに 恋ふれども 逢ふ因を無み 大鳥の 羽易の山に わが恋ふる 妹は座
すと 人の言へば 石根さくみて なづみ来し 吉けくもそなき うつせみと 思
ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えぬ思へば (二一〇)

短歌二首

⑭ 去年見てし秋の月夜は照らせれど相見し妹はいや年さかる (二一一)
⑮ 衾道を引出の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし (二一二)

或る本の歌に曰はく

⑯ うつそみと 思ひし時 携へて わが二人見し 出で立ちの 百枝槻の木 こちご
ちに 枝させる如 春の葉の 茂きがごとく 思へりし 妹にはあれど たのめり
し 妹にはあれど 世の中を 背きし得ねば かぎろひの 燃ゆる荒野に 白栲の
天領巾隠り 鳥じもの 朝立ちい行きて 入日なす 隠りにしかば 吾妹子が 形
見に置ける 緑児の 乞ひ泣くごとに 取り委する 物しなれば 男じもの
腋はさみ持ち 吾妹子と 二人わが宿し 枕づく 孀屋の内に 昼は うらさび暮
し 夜は 息づき明し 嘆けども せむすべ知らに 恋ふれども 逢ふよしを無み
大鳥の 羽易の山に 汝が恋ふる 妹は座すと 人のいへば 石根さくみて なづ
み来し 好けくもぞ無き うつそみと 思ひし妹が 灰にてませば (二一三)

短歌三首

⑰ 去年見てし秋の月夜は渡れども相見し妹はいや年さかる (二一四)
⑱ 衾路を引出の山に妹を置きて山路思ふに生けるともなし (二一五)
⑲ 家に来てわが屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕 (二一六)